

# 第30章

## アルマ 32 - 35 章

### はじめに

アルマと同僚たちは、背教していたゾーラム人に神の言葉を宣べ伝えた。ゾーラム人の中のある人々は、試練を受けていたために御言葉を受け入れる準備ができていた。個人および集団での礼拝に関するアルマとアミュレクの教えは、贖罪の力や悔い改め、信仰、神の言葉、祈りの大切さといったイエス・キリストの福音の真髄に触れるものである。アルマとアミュレクは、自分の証に加えて 3 人の古代の預言者の証とメッセージを活用した。本章で採り上げている教義と原則は、イエス・キリストについての力強い証となっている。

### 注解

#### アルマ 32 章 神の言葉に信仰を持つ

• アルマ 32 章の中心となるテーマは、神の言葉に信仰を持つということである。神の言葉は肥沃な心の土壌に植えればふくらんで生長するとアルマは語っている。御言葉を試すと、あるいは御言葉に従うことによってそれを養うと、神の言葉は実を結ぶであろう。その実は最も価値があり、どんな甘いものよりも甘く、どんな白いものよりも白く、どんな清いものよりも清いものである。神の言葉をないがしろにすれば、このような実を得ることはできない。

御言葉に対する信仰を養ってこの実をよく味わえるようにするにはどうしたらよいだろうか。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長（1876 - 1972 年）はこう述べている。「生き生きとした躍動する信仰を持ちたければ、この教会の会員としてすべての義務を熱心に果たさなければならない。」（*Doctrines of Salvation*, ブルース・R・マッコンキー編, 全 3 巻 [1954 - 1956 年], 第 2 巻, 311）

十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老（1917 - 2008 年）も同様のことを教えている。「信仰が存在するとき、人は見ることのできないものに対して絶対の信頼を置き、その行動は天の御父の御心に完全に従ったものとなります。第 1 に絶対的な信頼、第 2 に行動、第 3 に絶対的な従順、この 3 つの要素が備わっていない信仰は偽物です。力のない、役に立たない信仰です。」（『リアホナ』2002 年 11 月号, 83）

#### アルマ 32 - 34 章 命の木

• 十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、アルマ 32 - 34 章を一つのまとまりとして研究することの重要性を強調している。

「この [アルマ 32 章にある] すばらしい説教の中で、アルマは神の言葉を種にたとえて信仰について一般的な説明をした後、キリストを信じる信仰に焦点を当てた説教に移ってい

る。神の言葉が生長して実を結ぶ木となり、その木には、まさに先にリーハイが見たキリストの愛を表す実がなるのである。……キリストは命のパンであり、生ける水であり、まことのぶどうの木である。キリストは種であり、木であり、永遠の命の実である。

しかし、モルモン書のこれに続く二つの章もまとめて読まなければ、この説教の中心である命の木の深遠なイメージは読者に伝わらないか、少なくとも大幅に損なわれてしまう。」（*Christ and the New Covenant* [1997 年], 169）



ジェフリー・R・ホランド、© IRI

#### アルマ 32 : 8 - 16 「自らへりくだる人々は幸いである」

• アルマは、貧しいゾーラム人たちに福音を学ぶ準備ができていることを知った。裕福なゾーラム人から拒絶されていたために心がへりくだっていたのである。

管理ビショッププリックのリチャード・C・エッジリービショップは、謙遜さと従順さは福音の祝福を受けるために必要な徳であると教えている。「わたしたちの多くは、謙遜さがしばしば誤解されたり弱点と見なされるような環境の中で、生活したり仕事をしたりしています。社訓や、管理者に望まれる特質として、謙遜さを挙げている会社や団体は多くはありません。それでも神がどのようにして働きかけられるかを学ぶとき、謙虚で従順な霊の持つ力がはっきりと見えてきます。神の王国では、偉大さは謙遜さと従順から始まるのです。対になっているこれらの徳は、神の祝福と神権の力への扉を開く第一の重要な段階です。何者であろうと、あるいは肩書きがどれほど立派なものに思われようと関係ないのです。感謝の心とともに、主に対する謙遜さと従順こそが、強さと希望をもたらすのです。」（『リアホナ』2003 年 11 月号, 98 参照）

• 主の目から見ると謙遜さは大切なものであるため、主はわたしたちが謙遜になれるよう助けてくださることがある。ア

ルマ 32:8-16 には、謙遜になる二通りの方法が挙げられている。13 節では「やむを得ずへりくだっている」人々、14 節と 16 節では「御言葉のために」自ら進んでへりくだる人々のことが述べられている。

• 七十人のカーロス・E・エイシー長老（1926 - 1999 年）もこの二組の人々について述べている。「わたしたちのほとんどは、『ニーファイ人のサイクル』を性格の一部として持っているようである。わたしたちが素直であるとき、謙遜になって成長し、豊かな霊性を養うことができる。その後、自己満足に陥り、高慢になることがある。……神と信仰生活のことをいつも心に留め、そして常に礼拝と義にかなった生活によってこのサイクルを断ち切るなら、その方がどんなにかよいことであろう。主の言葉によって謙遜になり、どんな境遇に置かれようとも神を覚えていられるだけの霊的な強さがある方がどんなにかよいことであろう。」（*Family Pecan Trees: Planting a Legacy of Faith at Home* [1992 年], 193 - 194）さらに詳しい情報と、高慢のサイクルを表す図については、付録から「義と悪のサイクル」（398 ページ）を参照する。

• やむを得ずへりくだることには試練が伴うことがあるが、エズラ・タフト・ベンソン大管長（1899 - 1994 年）は、そのような試練に遭うことなく自らへりくだることのできる方法を述べている。

「わたしたちは、兄弟姉妹に対する憎しみを克服し、彼らを自分自身のように尊び、また自分以上に尊重することによって、進んでへりくだることができます（教義と聖約 38:24; 81:5; 84:106 参照）。

勧告と懲らしめを受け入れる人は、自分の意志で謙遜になる道を選べます（モルモン書ヤコブ 4:10; ヒラマン 15:3; 教義と聖約 63:55; 101:4-5; 108:1; 124:61, 84; 136:31; 箴言 9:8 参照）。

わたしたちは、自分を傷つけた人を赦すことにより、進んでへりくだる方を選ぶことができます（3 ニーファイ 13:11, 14; 教義と聖約 64:10 参照）。

また、無私の奉仕を行うことによって、進んでへりくだることができます（モーサヤ 2:16-17 参照）。

伝道に出て、人を謙虚にする神の御言葉を宣べ伝えるなら、自分からへりくだる道を選ぶことができます（アルマ 4:19; 31:5; 48:20 参照）。

もっと頻繁に神殿に参入することにより、自らへりくだることができます。

罪を告白してそれを捨て、神から生まれる人は、自分の選びによって謙遜になることができます（教義と聖約 58:43; モーサヤ 27:25-26; アルマ 5:7-14, 49 参照）。

そして、神を愛し、自分の思いを神の御心に従わせ、神を第一にした生活を築き上げることによって、わたしたちは進んでへりくだることができるのです（3 ニーファイ 11:11; 13:33; モロナイ 10:32 参照）。」（『聖徒の道』1989 年 7 月号, 7 参照）

## アルマ 32:17-18 信仰がしるしの上に築かれることはない

• 十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は、信仰を得るためにしるしを求めることには危険が伴うと述べている。

「しるしを見せることは、しるしによって知識に導かれる人に罪の宣告を招きかねない。そのような人は信仰をはぐくむ機会を逸し、義にかなった行いから離れていくため、普通の方法で信仰をはぐくんで霊的な成長を遂げている人よりもさらに厳しい罰を身に招くことになるのである。

神はまず、信仰をはぐくむことを求めておられる。これをせずにしるしを求める者は別の『罪の宣告』も招く。

その一つは、誤った道に導かれることである。神は、しるしや不思議を見せて異なる神々を礼拝させようとたくらむ預言者に従わないよう古代のイスラエル人に警告された（申命 13:1-3）。救い主は使徒たちに、終わりの時には『偽キリストたちや偽預言者たちも起こって、大きなしるしと不思議を示し、できれば、聖約による選民である真の選民をも惑わそうとするであろう』と教えられた（ジョセフ・スミス・マタイ 1:22。マタイ 24:24; マルコ 13:22 も参照）。……

……現代では、信仰のない人に教えを説いたり信じさせたりするために、神が奇跡やしるしをお使いになることはない。だから、わたしたちはそのような目的でしるしを求めるべきではなく、またしるしを求める者たちが主張する、いわゆる霊的な証拠をうのみにするべきではないのである。」（*The Lord's Way* [1991 年], 85 - 86）

## アルマ 32:21 信仰と希望

• 十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、わたしたちが信仰の意味をもっとよく理解できるようにするため、次のように語っている。

「信仰が信仰であるためには、まだ知らされていないあるものを中心に置かなければならない。信仰が信仰であるためには、証拠による裏付けがないものをも信じなければならない。信仰が信仰であるためには、未知のものを信じな

ければならない。信仰が信仰であるためには、光の端まで歩いて行き、その先の暗闇に少し足を踏み入れなければならない。あらゆることが知らされ、あらゆることが説明され、あらゆることが証明されなければならないとしたら、信仰を持つ必要はない。実際、そこに信仰の入り込む余地はないのである。……

信仰には二通りある。一つは、通常だれの生活にも働く信仰である。これは経験から生まれる。夜明けとともに新たな一日が始まり、春が来て、生き物が成長する。わたしたちはこれを経験から確信している。このような信仰は、起こることになっているという確信から来るものである。……

別の種類の信仰もある。この信仰は、もちろんだれでも持っているというわけではない。それは、物事を引き起こす信仰である。この種の信仰はふさわしさと準備を要し、揺らぐことがなく、ほかの方法では成し遂げられないことを成し遂げる。これは人を動かすような信仰である。このような信仰は、時には物をも動かす。……このような信仰は徐々にではなくまれる。このような信仰は驚くべき力であり、人知を超えた力を発揮することすらある。電気が見えないように、このような信仰も目には見えないものの、実在するのである。導きを受け、心を集中すれば、信仰は大きな効力を発揮する。……

懐疑と疑念に満ちた世の中であって、『見るまでは信じるな』という言葉は、『見せてくれれば信じよう』という風潮をおおっている。裏付けと証拠がまず欲しいのである。信仰に基づいて物事を考えることは難しいようである。

霊的な事柄においては、『見るまでは信じるな』とは逆のことが起こる。人がこれを理解するのはいつのことだろうか。霊的な事柄を信じるのは、霊的な知識を得る前なのである。目には見えないけれども確かに真実であるものを信じるとき、わたしたちは信仰を持っていると言えるのである。」「(“What Is Faith?” *Faith* [1983 年], 42 - 43)

●十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926 - 2004 年）は、希望と信仰と知識の関係について語り、この 3 つがその深遠で生き生きとした関係の中でどのように共存するかを説明している。「このように、信仰と希望は常に関連し合っていますが、必ずしも厳密に区別はできません。どちらが先とも言えません。希望は完全な知識ではありませんが、『確かに』生き生きとした期待を人に抱かせます（エテル 12：4。ローマ 8：24；ヘブル 11：1；アルマ 32：21 も参照）。」（『聖徒の道』1995 年 1 月号, 39 参照）

### アルマ 32：21 - 37

アルマは信仰と知識の違いをどのように説明しているか。

#### アルマ 32：23 幼い子供たちは靈感を受ける

●幼い子供たちは神から啓示を受けることがよくある。ニール・A・マックスウェル長老は、年長者が学ぶことのできる模範を幼い子供たちが示すことがあると言っている。

「子供たちはよく『心の思いと志』を主に向けています。そのような子供は、年がいかなくても、信仰にあふれています。教会の正規の召しを受けるには若すぎますが、『善い両親』（1 ニーファイ 1：1）に恵まれた場合は特に、模範を示す者として召されているのです。

聖典にあるように『御言葉が、これまで何度も幼い子供に与えられて』きました（アルマ 32：23）。例えば、復活されたイエスから教えを受けたニーファイ人の子供たちは、主が民に明らかにされたことよりも『大いなること』を大人や両親に教えました（3 ニーファイ 26：14）。

わたしは恵まれて、今はアリゾナに住むダン・バーカー兄弟と妻のナン姉妹を数人の養子の子供たちに結び固めました。何年前かに、3 歳になったばかりのネイトが言いました。『ママ、もう一人、女の子がこの家に来るよ。髪の毛と目が黒くて、遠くに住んでいる子だよ。』

賢明な母親は尋ねました。『どうして分かるの?』

『イエス様が言ったんだ。2 階からね。』

『うちには 2 階はないのよ』と母親は言いましたが、すぐに子供の言葉の重要性に気づきました。苦労と祈りを重ねた末に、1995 年秋にバーカー家族はソルトレーク神殿の結び固めの部屋で、カザフスタン生まれの黒髪でひとみの黒い女の子と、この世から永遠にわたって結び固められました。靈感を受けた子供たちは、両親に『大いなる驚くべきこと』を告げるのです（3 ニーファイ 26：14）。」（『聖徒の道』1996 年 7 月号, 79 参照）

#### アルマ 32：27 - 37 神の言葉を試すことによって改心に導かれる

●十二使徒定員会の M・ラッセル・バラード長老は、アルマが言うように自ら進んで御言葉を試すならば改心に導かれると教えている。

「教会の会員か否かを問わず、喜んで御言葉を試す意志を



持つと、イエス・キリストの福音への完全な改心はさらに容易になります(アルマ 32:27 参照)。それは真理を知りたいという願いと、その願いに従って行動しようとする望みを持った、思いと心の姿勢です。教会について学んでいる皆さんには、モルモン書を読み、それについて祈り、また心からジョセフ・スミスが主の預言者か否かを知らうと熱心に求めるよう試していただきたいのです。



真の改心は、御霊<sup>みたま</sup>の力を通じてもたらされます。御霊が心の琴線<sup>きんせん</sup>に触れるとき、心に変化が生じます。教会員か否かにかかわらず、人は御霊の働きかけを感じるとき、または生活の中で主の愛と憐れみ<sup>あわれみ</sup>が表れているのを目にするときに、霊的に高められ、強められて主への信仰が増していきます。御霊を伴うこれらの経験は、人が喜んで御言葉を試そうとするとときに自然に起こる事柄です。そしてわたしたちは福音が真実である、とを感じるようになるのです。」(『リアホナ』2001 年 1 月号, 89 参照)

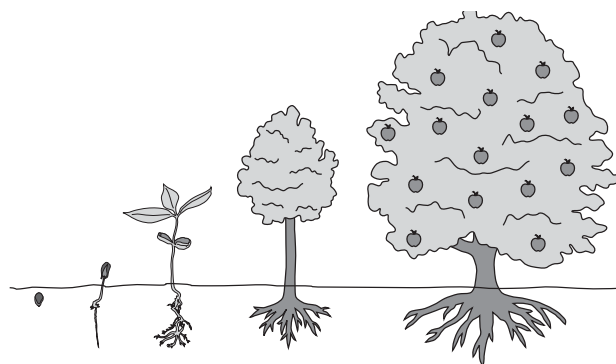
・時には、アルマ 32:28 で述べられているように信仰の種がふくらみつつあるのを感じ、心が広がり、理解力に光が注がれ、御霊から来る良い気持ちを感じ始めることがあるが、この感覚を言葉で表現するのは難しい。しかし、表現し難いとはいえ、確かにこのように感じるのである。

十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、言葉で表現し難い経験について語っている。無神論者<sup>あかし</sup>に対して神が実在しておられることを証した。相手は、そのようなことは分かるはずがないと言った。パッカー会長は、自分の証を、塩がどのような味かを知ることと比較して話した(204 - 205 ページにあるアルマ 30:15 - 16 の注解を参照。また、「主のともし火」『聖徒の道』1983 年 10 月号, 35 - 37 も参照)。

**アルマ 32:28 - 30 「場所を設けて、種をそこに植える」ならば、育ち始める**

・神の言葉に対する信仰が増すということは、柔軟な心という豊かな土地に植えた信仰の種がもたらす実の一つである。大管長会のジェームズ・E・ファウスト管長(1920 - 2007 年)は、信仰と知識を増し、成熟させるための前提条件を次のように説明している。「わたしたちはまた、……自分自身の苗床を作らなければなりません。そのためには、強さと赦し<sup>ゆる</sup>を求める祈りを毎日ささげることによって地面を耕す

必要があります。高慢な心に打ち勝つことによって畑をならす必要があります。能力の限りを尽くして戒めを守ることによって苗床を作る必要があります。わたしたちは什分の一とそのほかのささげ物を納める際に、主に対して正直である必要があります。神権の偉大な力を招いて自分自身や家族、そのほか責任下にある人々を祝福できるように、ふさわしくする必要があります。信仰という霊的な種を育てるのに神聖な神殿や家庭ほど適している場所はありません。」(『リアホナ』2000 年 1 月号, 56 - 57)



・信仰の種を植えても、突然に生長するわけではない。ボイド・K・パッカー会長は、種が育つのを忍耐強く待つことの大切さを説明している。

「わたしの場合、証は突然にわき上がってはきませんでした。アルマが言うように、わたしの証も信仰という種から大きくなりました。……

何度か読んでも、力強い証が得られないかもしれません。が、落胆しないでください。そのような場合、ただモルモン書に登場するあの弟子たちと同じだけかもしれないのです。彼らは大いなる栄光のうちに神の力で満たされても『それを知らなかった』のです(3 ニーファイ 9:20)。

最善を尽くしてください。次の聖句を考えてください。『これらのことはすべて、賢明に秩序正しく行うようにしなさい。人が自分の力以上に速く走ることは要求されてはいないからである。しかし、賞を得るために勤勉に励むのは必要なことである。したがって、何事も秩序正しく行うようにしなさい。』(モーサヤ 4:27) (『リアホナ』2005 年 5 月号, 8 参照)

**アルマ 32:28 - 35 「それはわたしに良い気持ちを与え始めている」**

・アルマは証<sup>あかし</sup>の成長を表すために味覚という概念を用いた。預言者ジョセフ・スミス(1805 - 1844 年)も、真実の教義

を見分けることについて教えるのに味覚の概念を用いている。「これは良い教義である。深い味わいがある。わたしは永遠の命の諸原則を味わうことができる。皆さんもそうである。……わたしがこれらの永遠の命の言葉を、与えられたままに語るとき、皆さんはそれらを味わい、そして信じてわたしは知っている。皆さんは蜜は甘いと言う。わたしもそうである。わたしはまた、永遠の命の霊も味わうことができる。それが良いものであることを知っている。そしてわたしが聖なる御霊の靈感によって与えられたこれらのことを語るとき、きっと皆さんはそれらを甘いものとして受け入れ、いっそうの喜びを得ることであろう。」(History of the Church, 第 6 巻, 312, 強調付加)

・元中央若い女性会長のジャネット・ヘイルズ・ベッカム姉妹は、聖文を読むときの気持ちを次のように語っている。「御霊の教えを見分けられるようになるのは、信仰を現実のものとするうえで重要な事柄です。娘のカレンは自分の経験を次のように話してくれました。『まだ小さいとき、初めてモルモン書を読み始めました。何日も読み進めた後で、ある晩、1 ニーファイ 3:7 の箇所に来ました。……これが有名な聖句だとは知りませんでした。この箇所を読んだとき、とても強い感銘を受けました。天の御父はわたしたちがその戒めを守れるように助けてくださるのだ、ということに感動しました。でも、その感動は、ただの感情以上のものでした。両親が赤い鉛筆で聖典に印を付けているのを見たことがあったので、わたしは立ち上がって赤い鉛筆が見つかるまで家中を探し回りました。そして、とても厳粛な重々しい気持ちで、自分のモルモン書の、その聖句に印を付けました。』カレンはこう続けています。『それから何年もの間、あの経験を何度も何度もしました。聖典を読んである聖句に深い感銘を受けるのです。そしてやがて、そのような気持ちは聖霊であると分かりました。』」(『聖徒の道』1998 年 1 月号, 86)

**アルマ 32:35** 「おお、それならば、このことはほんとうではないだろうか」

・アルマは貧しいゾーラム人に語ったとき、アルマのメッセージが真実かどうかを自分で見極めるよう勧めた。人はほかの人に代わって福音の原則を学ぶことはできない。ニール・A・マックスウェル長老は、人は各々神聖な真理が確かなものであることを自分で知らなければならないと述べている。

「アルマは信仰をはぐくむことと、本人の知的面、情緒面での経験に伴って信仰を実際の知識にする方法について説明している。信じる者の理解力が増し、その心が広がってから、アルマはこう問いかける。『おお、それならば、このことはほんとうではないだろうか。』そしてそれはほんとうである

とアルマは言う。『そのように見分けがつくからであり、こうしてあなたがたは、それが善であることを必ず知るようになる。』(アルマ 32:35)

それぞれの神聖な教義が真理であることを証明と確認というプロセスを通して見分けることは実際に可能であり、それは、『わたしは知っています』という言葉の十分な根拠となるのである。」(Things As They Really Are [1978 年], 10)

#### アルマ 32:33 – 43

この聖句でアルマが教えている事柄を学ぶことによって、1 ニーファイ 8 章に出てくるリーハイの命の木の示現に関する理解はどのような点で深まるか。

#### アルマ 32:33 – 43 御言葉を養う

・七十人のブルース・C・ヘーフェン長老は、アルマが用いた植物を育てるたとえを使って、わたしたちの生活に福音の祝福をもたらす養いには二つの側面があると指摘している。「人の成長には二つの側面があります。雑草を取り除くことと、花を育てることです。わたしたちが自分の役割を果たすならば、救い主の恵みによってその両方ができるよう祝福されます。まずは根気よく、罪や誤った選択という雑草の根を抜き取らなければなりません。草刈りをするだけではなく、根っこから抜き取って完全に悔い改め、憐れみを受けるための条件を満たすのです。しかし、赦しを受けるのは成長の一部にすぎません。負債を払うだけではないのです。目標は日の栄えの人となることです。心の土地を整えたら、絶えず神の特質の種を植え、雑草を抜き、養い育てるのです。やがて努力と自己修養が実を結び、主の賜物、つまり希望や柔和さという『恵みの花』が開きます(「心に光あり」『賛美歌』139 番参照)。心の庭には、命の木さえ根を下ろし、甘い実をつけ、『神の御子の喜びによって』(アルマ 33:23) 重荷がすべて軽くなることでしょう。そして心に慈愛の花が咲くとき、キリスト御自身の愛の力で人を愛せるようになるでしょう(モロナイ 7:48 参照)。」(『リアホナ』2004 年 5 月号, 97 参照)

#### アルマ 32:37 – 38, 42 – 43 キリストの弟子となる

・大管長会のディーター・F・ワークトドルフ管長は、キリストの弟子となる方法を教会員に教えている。

「これは……イエス・キリストに従う者が歩む平穏な道です。

しかしながら、それは手っ取り早く、一夜にしてできるものではありません。

最近、ある友人から手紙をもらいました。<sup>あかし</sup>証を強く生き生きと保つことが困難であると打ち明け、助言を求めてきたのです。

わたしはこの友人に返事を書き、回復された福音の教えにいつそう従うよう生活を整えるためにできる具体的な事柄を、愛情を込めて幾つか提案しました。驚いたことに、わずか1週間後に返事が来ました。その手紙の要旨はこのようなものでした。『提案されたことを試してみましたが、うまくいきませんでした。ほかにどんな提案がありますか。』

兄弟姉妹の皆さん、長く続けなくてはなりません。永遠の命を得るのは、短距離レースではありません。忍耐という長距離レースなのです。神聖な福音の原則を繰り返し応用し、日々、生活の一部とする必要があります。

朝、畑にトウモロコシの種をまいて夕方には実がなることを期待する農夫のように、福音の祝福をすぐに受けられるものととらえてしまうことが往々にしてあります。アルマは神の御言葉を種にたとえ、『信仰と熱意と忍耐と寛容』の成果として種は少しずつ生長して実を結ぶ木になると説明しました(アルマ 32:43)。確かに、祝福が直ちに來ることもあります。心の中に種を植えて間もなく、種がふくらんで芽を出し、生長し始めると、その種が良いものであることが分かります。弟子として歩む道に足を踏み入れたまさにその瞬間から、目に見えるか否かにかかわらず、神から祝福を受けるようになります。

しかし、『その木に構わず、養い育てることに心を配らなければ』(38 節)、完全な祝福を受けることはできません。

種が良いものであることを知るだけでは十分ではないのです。『木が根付〔く〕ように、十分に注意して養いを与え〔る〕』(37 節) 必要があります。そのとき初めて『どんな甘いものよりも甘く、……どんな清いものよりも清い』実を食べ、『満ち足りるまでその実を食べて、もう飢えることも、渴くこともな〔く〕』なるのです(42 節)。

弟子として歩む道は長い旅路です。わたしたちの人格を練り、心を清めるためには、精練の教えが必要です。忍耐強く弟子の道を歩むことにより、わたしたちの信仰の強さと、自分の意思ではなく神の御心<sup>みこころ</sup>を喜んで受け入れる気持ちの深さを自分自身に示すのです。

単にイエス・キリストについて語り、主の弟子であると宣言するだけでは不十分です。わたしたちの宗教の象徴を身の回りに並べるだけでは不十分です。弟子になることはス

ポーツ観戦ではありません。テレビのスポーツ番組を見ながらソファに座って選手に助言をしているだけでは、健康の恩恵に浴することはできません。それと同様に、何もせずに傍観するだけでは、信仰の祝福を期待することはできません。にもかかわらず、『観客席の弟子』になる方を好んだり、それを信仰生活の基本的な姿勢としたりしている人もいます。

わたしたちの宗教は、他人任せの宗教ではありません。ほかの人の善い行いを傍観するだけで、福音の祝福を受けることはできません。傍観者であるのではなく、人に教えたことを自分で実行する必要があります。……今こそ、イエス・キリストの福音を受け入れ、主の弟子となり、主の道を歩む時です。』(「キリストの弟子として歩む道」『リアホナ』2009 年 5 月号、76 - 77 参照)

## アルマ 33:2 ゴーラム人の間違った教え

• アルマは、ゴーラム人の教えが間違っていることを指摘するために聖文を何度も用いた。まず、ラミアンブトムの上でなければ祈ることができないという間違った考えについて話した。「荒れ野」にしようと、「畑」にしようと、「家」にしようと、「部屋」にしようと、神に祈り、神を礼拝することができることを、聖文を使って説明したのである(アルマ 33:2 - 11 参照)。次にアルマは、すべての預言者がキリストの來臨について証しているという事実を教えた(アルマ 33:14 - 22 参照。モルモン書ヤコブ 7:11 も参照)。

## アルマ 33:3 - 11; 34:17 - 27, 39 絶えず祈る

• 大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、絶えず祈るとはどういう意味かを次のように説明している。

「神は祈るように命じられたとき、『絶えず祈る』『常に祈る』『熱烈な祈り』といった言葉をお使いになりました。

こうした戒めを読むと、数多くの言葉を使うことは求められていないと分かります。事実、救い主は、祈るときには言葉数を多くする必要はないと言われました。神が求めておられるような熱意あふれる祈りとは、美辞麗句を連ねた祈りでも、人里離れた所での長時間にわたる祈りでもないのです。……

わたしたちの心が神に向けられるのは、神を愛する心と、神の慈しみを信頼する心に満たされたときだけです。』(『リアホナ』2002 年 1 月号、17 - 18)

## アルマ 33:19 - 23 荒れ野で掲げられたキリストの予型

• 昔のイスラエルの民は荒れ野でつぶやいたため、主は毒蛇<sup>どくへび</sup>



を送って、霊的に侵された人々をへりくだらせた。多くの人  
が死んだが、悔い改めた人々は預言者に立ち返り、蛇を取り  
去るよう主に願ってほしいと預言者に頼んだ。そこで神は青  
銅の蛇を作って竿の先に掲げるようモーセに命じ、掲げた蛇  
を見る者はすべて癒されると約束された（民数 21:4-9  
参照）。

青銅の蛇は「予型」であった。ダリン・H・オックス長老  
は、「予型」とは、「何かに似ているもの、何かを思い起こさ  
せるもの」であると説明している（『聖徒の道』1993 年 1 月  
号, 44 参照）。



イエス・キリストは、御自身  
を証する予型が荒野で上げ  
られたとお教えになった。  
「ちょうどモーセが荒野でへ  
びを上げたように、人の子も  
また上げられなければならない。  
それは彼を信じる者が、  
すべて永遠の命を得るためだ  
る。」（ヨハネ 3:14-15）  
多くのイスラエル人は心がか

たくなで信じようとしなかったため、この単純な癒しの方法  
を実行して癒されることを拒んだ（1 ニーファイ 17:41 参  
照）。アルマはすべての人に、「神の御子を信じるようにしな  
さい。神の御子が将来、御自分の民を贖うために降臨され  
ること、……その民の罪を贖〔われる〕こと……を信じてほ  
しい」と呼びかけている（アルマ 33:22。ヒラマン 8:14  
- 15 も参照）。そして、この証を養うことによって重荷が軽  
くなり、永遠の命に導かれると約束している（アルマ 33:23  
参照）。

### アルマ 34:9-12 無限にして永遠であるイエス・キ リストの贖罪

• 十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老（1915  
- 1985 年）は、主の無限にして永遠の犠牲の効力が及ぶ範  
囲を次のように定義している。「預言者たちが無限の贖罪  
と言うとき、それはまさにそのとおりのことを意味している。  
その効力はすべての人と地球そのもの、ならびに地上のあら  
ゆる生き物に及び、終わりのない永遠の広がりにつながるの  
である。」（*Mormon Doctrine*, 第 2 版〔1966 年〕64。モー  
セ 7:30 も参照）

• 十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老は、イエス・  
キリストの贖罪がどのような点で無限なのかを列挙してい  
る。

「主の贖罪は無限で、終わりがありません（2 ニーファイ  
9:7; 25:16; アルマ 34:10, 12, 14 参照）。贖罪は全人  
類が永久の死から救われることにおいても無限です。主の  
計り知れない苦難に関しても無限です。贖罪は時において  
も無限であり、動物の犠牲という以前の象徴は終わりを告げ  
ました。贖罪は範囲においても無限で、ただ 1 度だけ行わ  
れました（ヘブル 10:10 参照）。贖罪の効力は無数の人々  
だけでなく、主によって造られた無数の世界にも及んでいま  
す（教義と聖約 76:24; モーセ 1:33 参照）。人間のいかな  
る尺度も理解も超えた無限の贖いなのです。」

イエスがそのような無限の贖いのできる唯一の御方であ  
ったのは、死すべき母と不死不滅の御父との間にお生まれ  
になったからです。この特異な生得権のゆえに、イエスは  
無限の御方なのです。」（『聖徒の道』1997 年 1 月号, 40）

### アルマ 34:14 「すべての部分がこの大いなる最後の 犠牲を指し示している」

• アミュレクは、モーセの律法そのものの目的は、最終的に  
キリストがゲツセマネとゴルゴタで行われた「大いなる最後  
の犠牲」に人々の心を向けさせることにあると述べている。  
動物の犠牲や祝祭、その他日常的な儀式には、イスラエルの  
子らの心をキリストに向かわせる予型と影がある。今日、聖  
餐は似たような形でイエス・キリストの贖いの使命をわたし  
たちに思い起こさせてくれている。同様に、古代の過越の  
祭は、主がイスラエルをエジプトの物理的な束縛から解放し  
てくださったことを年に 1 度記念するものであった。今日  
では、復活祭が、主の贖罪と復活を通して人が霊的な束縛  
から贖われるようになったことを記念する年に 1 度の行事と  
なっている。

### アルマ 34:14-17 「悔い改めを生じる信仰」

• ロバート・E・ウエルズ長老は、七十人の会員として奉仕し  
ていたときに、イエス・キリストの贖罪の効力を受けるに十  
分な変化を生活にもたらすのに必要な信仰について語った。

「『キリストの贖罪の効力がわたしに及ぶようにするには、  
どれくらいの信仰が必要だろうか。』別の言葉で言えば、救  
いを得るにはどれだけの信仰が必要だろうか。その答えは  
……アルマ書にある。預言者アミュレクは、この単純であり  
ながらも偉大な原則を教えている。『神の御子は……人々  
が悔い改めを生じる信仰を持てるようにするその道を設け  
るのである。』（アルマ 34:14-15, 強調付加）

悔い改めを生じる信仰という言葉に注目してほしい。こ  
れが鍵である。アミュレクはこの表現を 3 つの節の中で 4  
回使っている（アルマ 34:15-17 参照）。……



© 1995 デル・ハートン

ということは、キリストを信じる信仰と悔い改めを生じる信仰の両方を兼ね備えることがきわめて重要なのである。こう考えると、単純で明らかな信仰、つまり、悔い改めるに十分な信仰の大切さが非常によく理解できるようになる。山を動かすほどの信仰は求められていないようである。異言を語れるような信仰も、病人を癒せるような信仰も要らない。必要なのはただ、自分が罪を犯したことを認め、罪を悔い改め、罪の苦しみを感じ、二度と罪を犯さずに主なるキリストを喜ばせたいと望むだけの信仰なのである。このような信仰があれば、贖罪という最大の奇跡がわたしたちに効力を及ぼすようになる。この贖罪によって、キリストは、当然受けるはずの罰から人を救ってくださるのである。」(“The Liahona Triad,” *Doctrines of the Book of Mormon: The 1991 Sperry Symposium*, ブルース・A・バン・オーデン, プレント・L・トップ共編 [1992 年], 6 - 7)

#### アルマ 34:15 - 16 「<sup>あわ</sup>憐れみは正義の要求を満たし」

• 正義には、次の二つの側面がある。

1. 律法に従うと祝福を受け、喜びを味わう(教義と聖約 130:20 - 21 参照)。
2. 律法に従わないと罰を受け、悲しい思いをする(アルマ 42:22 参照)。

• 正義の要求を満たすには、次の二つの方法がある。

1. 決して律法を破らない。
2. 律法を破った場合、代価を払う。

問題——律法によって義とされる者はだれもいない(2 ニーファイ 2:5 参照)。すべての人は罪を犯している(ローマ 3:23 参照)。そのため、代価を払わなければならない。

• 罪の及ぼす影響は二とおりある。

1. 現世の律法によってわたしたちは絶たれる——正義が破られたため(アルマ 42:14 参照)。
2. 霊の律法によってわたしたちは滅びる——「清くないものは、どのようなものでも神の王国に入ることができない」(1 ニーファイ 15:34)。

イエスは「律法の目的を達するため、……罪に対する犠牲として御自身をささげられる。」(2 ニーファイ 2:7)

• キリストは憐れみの律法を施行されたが、どのようにしてされただろうか。

1. 律法を完全にお守りになり、罪がなく、律法によって義とされた。
2. ゲツセマネの園と十字架上で苦しみ、あらゆる罪を犯したかのごとく罪に対する代価を払われた。
3. わたしたちのために御父に対して弁護してくださる(アルマ 33:11; 教義と聖約 45:3 - 5 参照)。

#### アルマ 34:32 - 34 「悔い改めの日を引き延ばすことのないように」

• 天の御父のもとに戻る努力をしても、引き延ばしたり決断を下すのをためらったりしていると、戻れなくなる可能性がある。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、「福音の原則に当てはめて考えた場合、引き延ばしは永遠の命の盗人である。永遠の命とは御父と御子のもとで暮らすことである」と言っている(*The Way to Perfection* [1970 年], 202)。

#### アルマ 34:32 - 34

どのような状況があるために現世の生涯が終わった後の悔い改めは難しいと、アミュレクは警告しているか。

#### アルマ 34:34 - 35 同じ霊が肉体を所有する

• 最終的に主の御<sup>みたま</sup>霊に導かれるか悪魔の霊の影響力に屈



するかを人は日々の選択によって決めているということを、アミュレクは明らかにした。ハロルド・B・リー大管長は、アルマ 34：35 について次のように説明している。「悔い改めず、悪人のままで死ぬ人には、悪魔が自分のものであるという印を押すと聖文では言われている（アルマ 34：35 参照）。これは、自分が行ったことに対して最後の 1 コドラントを払ってしまうまでは、悪魔の支配から逃れられないということである。このような人は、正義の要求が満たされるまでサタンに打たれた後にサタンの支配から解放されて、御父の日の栄え、月の栄え、星の栄えの世界のうち、本人のこの世での生活に見合った世界に送られる。」（*The Teachings of Harold B. Lee*, クライド・J・ウィリアムズ編〔1996 年〕, 59）

・十二使徒定員会のメルビン・J・バラード長老（1873－1939 年）は、この世にいる間に悔い改めることの大切さを強調している。

「この人生は、人が悔い改める時期です。人間的な弱さを克服しないまま墓に下ったとしてもあらゆる罪や悪に走る性質と墓の中で決別できるなどと考えるではありません。罪も性癖も、わたしたちから離れることはないのです。霊が肉体から離れても付いてきます。

……〔現世〕は人が変わりやすく、影響を受けやすい時期なのです。」（*The Three Degrees of Glory: A Discourse*〔1922 年 9 月 22 日〕, 11－12）

## アルマ 35 章 アルマ 43－62 章に記録されているニーファイ人とレーマン人の間の戦争

・年代順から言えば、アルマ 43 章はアルマ 35 章の後である。「アルマは自分の民の罪惡、すなわち民の中にある戦争と流血と争いを嘆き」、息子たちを集めて「それぞれ」「義にかかわることについて」教えた（アルマ 35：15－16）。モルモンは、アルマが息子のヒラマン、シブロン、コリアントンに語った言葉を挿入したことに触れてから「ニーファイ人とレーマン人の間の戦争の話」に戻っている（アルマ 43：3。アルマ 35 章とアルマ 43 章の前書きの年代を比較する）。

アルマ 35 章では、43 章から 62 章に出てくるレーマン人とニーファイ人の戦争の原因となった状況を説明している。紛争、ひいては戦争の原因となった出来事をアルマ 35 章からまとめると次のようになる。

1. 「ゾーラム人の中で多数派を占める者たちは、……御言葉のために自分たちの慣行〔偽善売教〕が崩れたことに腹を立て……た。」（3 節）

2. 改宗したゾーラム人たちは「その地から追い出された。これらの人々の数は多く」（6 節）、ジェルシヨンの民（アンモンの民）の中に行って住んだ。その地でアンモンの民は彼らに食べる物や着る物を与え、また土地を受け継ぎとして譲り与えた（9 節参照）。それまで住んでいた土地では、彼らは貧しく、汚れた者、粗末な衣服を着ている者としてさげすまれていた（アルマ 32：2－3 参照）。
3. ジェルシヨンの民が新しい改宗者たちを受け入れたので、ゾーラム人は激しく怒り（アルマ 35：8 参照）、ゾーラム人の支配者は、「アンモンの民を脅す言葉をたくさん吐いた。」（9 節）しかし「アンモンの民は彼らの言葉を恐れなかった。」（9 節）、ゾーラム人とその支配者はさらに怒りをかき立てられた。
4. 改宗しなかったゾーラム人たちは、「レーマン人と交わり始め、レーマン人を扇動して」改宗したレーマン人であるアンモンの民に対して「怒らせるようにした。」（10 節。アルマ 43：6－7 も参照）

アルマ 35 章に記録されている出来事は、アルマ 43－62 章に記録されているニーファイ人とレーマン人の間の長期にわたる戦争がどのようにして始まったかを明らかにしている。サタンはゾーラム人の心をあおり立てて怒らせた（2 ニーファイ 28：20 参照）。そしてゾーラム人は、離反したニーファイ人とレーマン人を扇動して怒らせ、善良な人々に対して戦いの武器を取らせようとしたのである。

## 理解を深めるために

- ・人の心はどうしたら「満た」され、それが絶えず主への「祈りとなる」だろうか（アルマ 34：27）。
- ・なぜイエス・キリストは無限の贖罪しよくざいを行えた唯一の御方だったのだろうか。
- ・人が悔い改めを引き延ばすことがあるのはなぜだろうか。悔い改めを遅らせることにはどのような危険があるか。

## 割り当ての提案

- ・アルマ 32 章を読んで、信仰をはぐくむことに関するアルマの教えのアウトラインを詳しく書く。望みが完全な知識になるまでどのように信仰が養われるか、またその過程で神の言葉がどのような役割を果たすかを示す。
- ・アルマ 33－34 章の祈りに関する教えを使って、あなたの祈りをさらに実り多いものにするためにできることを具体的に挙げる。